

及している retrogression の側面は、海上放浪民という比較的孤立した生活を送る民の場合もっと注意が払われても良かったと思う。類似点を求めるのに急なあまり、独立の innovation ということも見落されがちである。また、著者は何の説明もなく、high, middle, primitive cultures ということばを頻繁に使用しているが、これらの相違について説明が欲しいものである。

なお、この論文は、1954年にカリフォルニア大学（バークレイ）へ博士（Ph. D.）論文として提出されたものである。（前田成文）

John Bastin & R. Roolvink (eds.) *Malayan and Indonesian Studies, Essays presented to Sir Richard Winstedt on his Eighty-fifth Birthday*. Oxford Univ. Press, 1964. xii + 357 p.

マラヤにおいて、「最後のそして最も偉大な」(Bastin) 英国植民地学者の、リチャード・ウィンステッド卿の85才の誕生日（1963年）を記念して、彼に献梓された19の論文集である。2人の編者は、かつてマラヤ大学の歴史科およびマレー研究科の教授であったが、現在は各タイギリスとオランダに帰っている。

ウィンステッドの著作活動が、言語・文学・歴史・経済・工芸・法律・宗教と、音楽以外のマレー文化の殆んど全域を覆うものであったように、本書も執筆者の国籍・専門分野ともに多種多忙で、彼の面目を躍如とさせている。

バスティンの巻頭の「序」と Zainal-Abidin b. Ahmad の巻末のマレー語による「マレー研究におけるリチャード卿の貢献」によって、ウィンステッドの業績を知ることができる。但し、書物の出版年代等両者の間に不統一があり、ウィンステッドの“A History of Malaya”の日本語訳として太平洋協会の「マライ史」と野口勇訳の「マレーの歴史・自然・文化」を掲げているが（p. 11）、後者は、ウィンステッドの編集した1923年の Malaya の訳ではないか。

古代史に関しては、フランスの G. Coèdes がスマトラのパレンバンに Kedukan Bukit 碑（Sri Vijaya 朝）の再解釈と、カリフォルニア大の Paul Wheatley のマレー半島の古代史を、地域名の正確な identifi-

cation という点から問題を提供している。更にマラッカが海港として栄える以前の東南アジアの経済史をひもとく鍵として、クラ海峡の Takuapa の問題を Alastair Lamb（マラヤ大学）が扱っている。

マラヤの近代史というと殆んど、15、6世紀以降から敘述されるが、このカテゴリーに入る論文は7つを数える。Wang Gungwu（マラヤ大学）は、初期マラッカの歴史を中国史料から検討し、1403-5の中国マラヤ関係の始まりを説く。C.R. Boxer は、英語文献の少ない、1629のアッチェ人のマラッカ襲撃に光を投げるポルトガル資料を3つ英訳紹介の労をとっている。D.K. Bassett（マラヤ大学）は、18世紀後半のマレー半島を、英国の商業戦略的関心から見る。英国の統治に関しては、C.M. Turnbull と Emily Sadka との2つの論文がある。バスティンは、往々マレーシア人はウィンステッドの歴史視点は受け入れられず、マレーシアの歴史はマレーシア人の手でと主張するが、subject-matter に関する限り、ウィンステッド程、マレー人の視点に立ってマラヤの歴史を解釈したものはないではないかと強調する。そして、マラヤ近代史に歴史上の実在人物のパーソナリティの研究に欠けていることを鋭く指摘して、今後のマラヤ歴史研究の方向を示唆している。C. Skinner は、19世紀のマラヤ、タイ関係理解の為に、バンコックに残っている1839年の Kedah letter の紹介をしている。

ウィンステッドへのこの論文集の中であって特異なのは、L.A.P. Gosling の現地調査に基く Trengganu 州の Baba Chinese の移動と同化とを追跡した論文と、C. Geertz のバリ島における最近の宗教的变化（Internal Conversion）とを扱った論とであろう。

言語・文化に関しては6つの論文がある。マレー編年史の起源と本質とを2人のオランダ人学者が各々論じている。A. Teeuw と P.E. de Josselin de Jong である。R. Roolvink, P. Voorhoeve, C. Hooykaas などの大家も各々文献校訂をしている。インドネシア文学専門の A.H. Johns は、Amir Hamzah を、その詩的生長発展過程を追いつつながら「マレーの王子であってインドネシアの詩人」という風に位置づけている。

多くの Festschrift がそうであるように、全体としての統一は無いが、一つ一つの論文は各々の専門家にとって参考になろう。（前田成文）